地域の自然を活用した自然体験と環境教育の取り組み(2)

宮　野　純　次

はじめに

地域の自然を活用した自然体験と環境教育に関して、昨年に引き続き、先進的に実践している団体・施設などを訪問し、そのプログラムや実践状況について調査・研究してきた。また、五感を使った活動であるネイチャーゲームの基本理念とその実践に関する調査・研究を踏まえて、わが国におけるネイチャーゲームの具体的な取り組みについても、継続的に調査・研究を進めてきている。さらに、自然体験型環境教育を実践する場としての本学の「京女の森」並びに「京女　鳥部の森」における体験活動も継続している。

1．公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会のネイチャーゲーム研修会

（1）全国ネイチャーゲーム研究大会 in 北海道

自然体験型環境教育であるネイチャーゲームの理念とその実践について調査・研究を進めるために、「第26回全国ネイチャーゲーム研究大会 in 北海道2016」に、2泊3日〈2016年6月3日（金）～6月5日（日）〉で参加した。

「北の大地のめぐみと自然との共生」を大会テーマにした北海道大会の初日は、開会式の後、旭川市博物館館長の瀬川拓郎氏により、基調講演「アイヌの自然利用～生態系適応からみた歴史～」が行われた。アイヌは縄文以来、狩猟・漁労を基本的な生産としていたが、日本との交易が活発化すると、アイヌの狩猟・漁労は交易対象となる種に特化し、社会はその種の生態系と狩猟・漁労の方法に規定されたものへと大きく変化（アイヌ・エコシステム）してきたという指

摘であった。つまり、アイヌの自然利用は、日本との交易が拡大する中、商品生産と結びつきながら各地で変化･成立してきていた。アイヌは過去にとどまったのではなく、商品化する世界の中で、北海道という亜寒帯の生態系に高度に適応しながら、異なる道を選択することで、共存しようとした歴史であったということであった。

基調講演の後、２日目に実施されるワークショップの説明会がコース毎に行われた。ワークショップの内容は、次の６コースである。A「イシカラ・ベツ（石狩）の原生砂浜海岸の散策コース」～さっぽろシェアリングネイチャーの会～、B「ユーパロ（夕張）石炭博物館見学とズリ山ウォークコース」～ゆうばりネイチャーゲームの会～、C「北海道のクラフト・メロンパンづくりコース」～おほーつくネイチャーゲームの会～、D「トカプウシ（十勝）岳トレッキングコース」～さっぽろ幼児ネイチャーゲームの会～、E「フラヌイ（富良野）ラフティング＆食べ歩きコース」～サロベツシェアリングネイチャーの会～、F「ポンソウカムイコタン（渓谷の美しい所）でネイチャーゲーム三昧コース」～ゆうばりネイチャーゲームの会～。

２日目は、「原生砂浜海岸の散策」など、コース毎のアクティビティ体験が朝からスタートした。筆者は「E．富良野コース」に参加した。ラフティング場所である南富良野へ向けて早朝バスでの出発となった。「南富良野どんころ野外学校」に到着後、ラフティングの装備を着用し、レクチャーを受けた後、川に入った。

ラフティングは、南富良野を流れる空知川支流のシーソラプチ川をスタートし、約６kmを下り、空知川本流でゴールという内容であった（写真１参照）。気温が低く、小雨もちらつく中であったが、歓声が度々あがり、笑顔が弾けていた。途中、川へドボンした方もいらしたようだが、何カ所かの急流も乗り切りラフティングは無事成功した。川の流れをダイレクトに感じながら、川から見る自然風景を堪能できた。森と水、生き物たちとの出会いを川からの目線で体感し楽しむことができた。そして、ラフティングにチームワークが必要であ

ることも実感できた。このように、小雨の降る中での体験であったが、ラフティング後は五右衛門風呂に入浴し、冷えた身体を温めることができた。薪ストーブの側でいただく珈琲も格別であった。昼食は、富良野市街へ移動し北海道の食材を堪能した。富良野周辺でのラフティング体験と食の体験を通し、北海道の自然と人の営みについて体感しながら考える機会を得た。

2日目の夜は全体プログラムの「研究集会」で、今までのシェアリングネイチャー活動を振り返り、それぞれのこれからの活動を考える時間になった。考えたイメージを折り紙で表現し、個性豊かな皆のイメージを1つに合わせてシェアリングネイチャー曼荼羅ができあがった（写真2参照)。

3日目は「アイヌ民族博物館」に移動し、アイヌ文化を体験するプログラムであった。このアイヌ民族博物館には、北海道や樺太、千島列島、東北地方北部に住んでいたアイヌ民族の文化的所産が網羅されていた。茅葺きの家(チセ)をかたどった建物の中には、衣食住や生活様式などがわかりやすく展示されていた。このチセ5棟を中心に、かつての集落の様子が伝えられていた。チセ内ではアイヌの伝統芸能や手工芸の実演など、無形文化が伝承保存され、公開されていた。解説者から昔のアイヌの人々の生活や、風習、行事などについての説明とともに、国の重要無形民俗文化財に指定されているアイヌ古式舞踊〈アイヌの楽器ムックリ（口琴）やトンコリ（五弦琴)、イオマンテリムセ（熊の霊送りの踊り）など〉を数曲、鑑賞する機会を得た。また、かつてのアイヌ民族は、北海道の山野に自生する野草を様々な方法で食用、薬用などに利用し、ヒエ・アワなどの雑穀を家の周辺で栽培していた。アイヌ有用植物コーナーでは、そのうち代表的な約50種類が移植・栽培され、アイヌと植物との関わりもわかりやすく解説・展示されていた。このように、アイヌ民族博物館は、資料館とあわせてアイヌ文化の調査研究・伝承保存・普及を目的とした野外博物館として整備されていた。

「北の大地のめぐみと自然との共生」をテーマにした北海道大会において、ワークショップ体験、全体プログラムの研究集会における交流などに参加する

ことで、自然体験型環境教育であるネイチャーゲームの実践面と理念について体験しながら調査し研究を深めることができた。

（2）ネイチャーゲーム普及30周年記念事業

日本でのネイチャーゲーム普及30周年を記念して、「会員のつどい～ジョセフ・コーネル氏を囲んで～」が、山梨県北杜市にあるキープ自然学校を会場として、2016年９月30日（金）～10月２日（日）の２泊３日で開催された。

初日は、ジョセフ・コーネル氏による基調講演、これからのシェアリングネイチャー活動30年を考えるミーティング（写真３参照）、２日目の午前中はコーネル氏による野外ワークショップ（写真４参照）、午後は、会員によるフリープログラム「木の実や葉っぱで遊ぼう」「幼児と楽しもうネイチャーゲーム」「風と時間をつかまえよう」「ぬらし絵アート」など６種類のプログラムが前半・後半でそれぞれ組まれていた。筆者は、前半はコーネル氏の妻アナンディ夫人による「メディテーション入門」に、後半は「生き物カルタ取り［普及版］とネイチャープロファイル」に参加した。都合により、３日目午前中の体験活動に参加することはできず、１泊２日での参加になったが、とても充実した内容で、参加者とも交流が深まり、研究を進める上でも貴重な２日間であった。

２．京都かも川ネイチャーゲームの会への参加・調査

ネイチャーゲーム指導員の有志による地域の会として、本学がある京都市内には、京都かも川ネイチャーゲームの会があり、学生と一緒に参加し活動する機会に恵まれている。今年度は、京都かも川ネイチャーゲームの会が主催する「初夏のつどい」「初秋のつどい」「初冬のつどい」「早春のつどい」に参加し、里山の自然体験とネイチャーゲームを実践した。４月の「春のつどい」は、残念ながら悪天候のため中止になった。

５月の「初夏のつどい」は、「里山の自然体験とネイチャーゲーム　田植えをしよう！」がテーマであった。晴天に恵まれ、大人７名、子ども９名の参加

者とともに、集合場所からネイチャーゲーム「フィールドビンゴ」をしながら、活動場所となる岩倉農場へと向かった。田植え体験の後に、「森の色あわせ」などのネイチャーゲームを体験し、実践した。

9月の「初秋のつどい」は、「稲刈りとネイチャーゲーム　里山で収穫の秋を体験！」がテーマであった。天候にも恵まれ、大人8名、子ども13名の参加者とともに9月の里山での「フィールドビンゴ」をしながら、岩倉農場へと向かった。稲刈り体験の後には、「カメラゲーム」なども行った後に、活動の振り返りも行った。

12月の「初冬のつどい」は、「ネイチャーゲームで里山体験　お餅つきとわら細工を楽しもう！」がテーマであった。天候にも恵まれ、集合場所からは大人9名、子ども10名の参加者とともに、ネイチャーゲームの「フィールドビンゴ」をしながら、岩倉農場へと向かった。引き続き、ネイチャーゲームの「カモフラージュ」を実施した後に、活動の振り返りをした。お昼の餅つき体験の後には、わら飾り作りも行った（写真5参照）。

2月の「早春のつどい」は、「蹴上駅から早春の東山を歩こう！　里山ハイキングとネイチャーゲーム」がテーマであった。大人6名、子ども4名の参加者とともに、蹴上駅から京都一周トレイル、七福思案処、南禅寺のコースを散策した（写真6参照）。途中、ネイチャーゲーム「はじめまして」「音いくつ」「色いくつ」も実践した。

季節毎にネイチャーゲームの実践者や参加者との交流を継続的に行うことにより、具体的な取り組みに関する調査・研究を深めることができた。

3．ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」活動への参加・調査

「学校の土曜休日並びに地域での総合学習に対応する事業として、自然とのふれあいと協働作業を通じ、環境学習と子どもたちの『生きる力』を養う」という目的で、2002（平成14）年4月に開講された、ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」も、15年目の活動に入っている。

大阪府豊中市の服部緑地公園の一角にある「日本民家集落博物館」内の自然や畑、茅葺き（かやぶき）の民家が、主な活動場所になっている。小学生を対象に、第１・３土曜日（全15回）に開講される2016（平成28）年度のプログラム内容は、次の通りである。

①４/16 開講式、班編成（はじめまして･名札作り）、竹のお椀とお箸づくり、②５/７ 初めての野菜畑（畑と道具のお話、夏野菜の植えつけ）、野菜の不思議のお話、③５/21 サツマイモの植えつけ、蚕のお話、夏野菜の観察、民家（昔のおうち）めぐりスケッチ、④６/４ 玉ねぎの収穫と保管、紐結びと支柱たて、虫眼鏡を使ってみよう（自然観察のはじめの一歩）、⑤６/18 ジャガイモの話と収穫、夏野菜の初収穫、初夏の自然観察（館内の樹木や草花など）、⑥７/２ 野菜の生育と土・水・光、七夕飾り、ワラビ餅、民家で昔の暮らしミニ体験（掃除・蚊帳・昔遊び）、⑦７/16 夏野菜の収穫と試食、蚕の繭作りの観察、竹で水鉄砲を作って遊ぼう、⑧８/20 夏野菜の最後の収穫、夏野菜の撤去と畑の耕し、おやつ作りとお店屋さんごっこ、⑨９/３ ダイコンの種まき、秋野菜の話、こども環境会議（テーマ別にみんなの地球を！）、⑩９/17 里山観察（泉原の田んぼや畑を見学・親子参加の日帰りバス遠足）、⑪10/８ ダイコンの間引きと土寄せ、蚕の繭から糸紡ぎ、綿繰り・糸紡ぎ体験、⑫10/15 都市緑化植物園で秋の自然観察、笹船作りとネイチャーゲームなど、⑬11/５ サツマイモの収穫、サツマイモの不思議、畑で育ったコンニャク芋でコンニャクを作ろう・自然工作、⑭11/19 サトイモ・落花生の収穫、生き物は冬支度、手作りミニ織り機で、古布を裂いて織り物づくり、⑮12/10 修了式、畑に感謝（お餅つき大会・みそ汁大鍋）、ダイコンの収穫

毎回のプログラムにおいて、子どもたちは午前に畑を耕し、野菜を育て、作物の成長や周囲の自然を観察する（写真７参照）。昼には、採れたての野菜が入ったみそ汁を、自分で作った竹の箸やお椀で味わう（写真８参照）。午後には、自然文化（昔話、紙芝居、自然工作、自然とのふれあいゲームなど）を体験する。NPO法人シニア自然大学の講座を修了した自然活動リーダーを中心として、

教員や保育士を目指す本学学生も連携しながら、子どもたちのための自然体験活動が実践されている。

4.「京女の森」並びに「京女　鳥部の森」における活動

(1)「京女の森」における活動

1990（平成2）年にスタートした京都市左京区の大原尾越町に位置する京都女子大学の森（以下、「京女の森」と記す）での活動も、今年で27年目を迎えている。最初の5年間は、毎月ほぼ2回、学外からの専門家の協力を得ながら、京都女子大学の学生が参加する環境調査を実施してきた。標高が650～800m、広さは約24ヘクタールの水源涵養保安林で、戦後、人の手が加わらなかったことにより、自然が残されている地域になっている。1950年代後半の燃料革命以後、放置され天然更新しつつある旧薪炭林である。その一部にはスギが植林されているものの大部分がクリ、ミズナラを主体とする落葉広葉樹林からなっている。

フィールド調査の結果は、環境調査報告書『尾越のいのち』で報告している。この地域の5年間の気象観測や地質調査をはじめ、植生、菌類、昆虫、野鳥、両生・爬虫類、哺乳類等の総合的調査から、「京女の森」は極めて生物多様性が高いことが明らかとなっている。その後も引き続き、自然体験型環境教育を実践するフィールドとして活用している。

今年度は、秋に10名の学生を引率して、「京女の森」のニノ谷尾根コースで自然観察を実施した（写真9参照）。まず、ネイチャーゲーム「音いくつ」をスタートに、「フィールドビンゴ」をしながら散策した。尾根道の足もとのふかふか感も楽しみながらこのコースを歩くと、アカマツ、モミ、アセビ、ネジキ、タムシバなど様々な樹種からなる天然林とスギやヒノキだけの人工林との違いを簡単に比較観察できる（写真10参照）。尾根の途中には、樹齢数百年のアカマツの大木が枯れたまま残っている。のこぎりで枯れた根の一部を切ると、いまだに香り高い匂いもする。また、野生のシカが、リョウブの樹皮を食べた

後やその後に木が回復している状態も観察できる。ナメラ林道へ出ると、山腹を削って建設された林道で、露頭の観察も容易にでき、いろいろな意味で環境教育の実践の場となっている。自然体験学習では、どのコースでも、いのちの不思議に触れてもらい、感じてもらうよう指導している。こうした具体的な実体験の積み重ねの中から、「自然生態系」を実感していくことが大切である。

(2)「京女　鳥部の森」における活動

「遊々の森」協定により、環境教育のフィールドとして、阿弥陀ケ峯国有林(13ヘクタール)を「京女　鳥部の森」と名づけて活用している。「京女　鳥部の森」は、シイやナラが優先する林、ヒノキやスギの植林、ソヨゴ・リョウブが優先する林の三態に、大きく分けることができる。昔の里山であった雑木林とヒノキやスギを植林した人工林とが混在しており、両者を比較しながら観察することが可能である。

大学に隣接しているので、90分の授業の中で一周するようなコース設定ができる。環境教育研究、理科教育ゼミの授業、そして自然体験と環境教育の会での活動において、季節毎に継続的な自然観察とともに体験的な環境教育を実践している(写真11参照)。さらに、京都府シェアリングネイチャー協会の5月の総会の前には、「京女　鳥部の森」においてネイチャーゲームのアクティビティを実践する活動も行われている(写真12参照)。

おわりに

地域の自然を活用した自然体験と環境教育について、先進的に実践している団体や施設などを訪問し、そのプログラムを体験しながら実践者との交流を深めてきた。子どもたちと保護者、大学生や実践者と一緒に自然体験活動を継続的に実践することにより、自然の大切さ、自然と共生する私たち1人ひとりの生活のあり方、持続可能な地域社会の構築へ向けた取り組みへの理解が深まることを願っている。身近な自然とのふれあいから生涯学習へとつながる環境教

育が展開されることはますます重要である。

今後も地域の自然を活かした自然体験と環境教育について、本学の「京女の森」や「京女　鳥部の森」での継続的な活動に加え、地域で活動している団体と協力して活動することにより、五感を使った自然体験型環境教育を実施し推進していきたい。

引用・参考文献

ジョセフ・コーネル著、吉田正人・辻淑子訳（2013）『シェアリングネイチャーゲーム　自然のよろこびをわかちあおう』日本シェアリングネイチャー協会

公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会（2014）『公認ネイチャーゲーム指導員録　自然案内人2014年度版』日本シェアリングネイチャー協会

公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会（2015）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック　第7版―理論編―』日本シェアリングネイチャー協会

京都女子大学・京都女子大学短期大学部編（1995）『尾越のいのち―尾越山林環境調査報告書』京都女子学園

京都女子大学生命環境研究会（2011）『京女鳥部の森　散策マップ』京都女子大学生命環境研究会

宮野純次（2016）「自然体験型環境教育―身近な自然体験から行動へ―」能條歩編著『人と自然をつなぐ研究　ネイチャーゲーム大学講義録』公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会、pp. 151-174

宮野純次（2017）「地域の自然を活用した自然体験と環境教育の取り組み(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第30号、pp. 49-60

宮野純次・高桑進（2008）「体験型環境教育プログラムの調査と研究(1)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第21号、pp. 63-72

宮野純次・高桑進（2009）「体験型環境教育プログラムの調査と研究(2)」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』第22号、pp. 1-15

社団法人日本ネイチャーゲーム協会編（2005）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック　第6版―理論編―』ネイチャーゲーム研究所

社団法人日本ネイチャーゲーム協会編（2004）『ネイチャーゲーム指導員ハンドブック　第6版―アクティビティ編―』ネイチャーゲーム研究所

<キーワード>

自然体験　体験型環境教育　環境教育プログラム　ネイチャーゲーム

〔写真1〕全国ネイチャーゲーム研究大会in北海道　ワークショップE「富良野コース」ラフティング

〔写真2〕同大会全体プログラム「研究集会」　シェアリングネイチャー曼荼羅

〔写真3〕ネイチャーゲーム普及30周年事業　これからの活動30年を考えるミーティング

〔写真4〕ネイチャーゲーム普及30周年事業　コーネル氏による野外ワークショップ

〔写真5〕京都かも川ネイチャーゲームの会「初冬のつどい」わら飾り作り

〔写真6〕京都かも川ネイチャーゲームの会「早春のつどい」里山ハイキング

〔写真7〕ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」での活動①

〔写真8〕ジュニア自然大学「こどもゆめくらぶ」での活動②

〔写真9〕「京女の森」での活動①

〔写真10〕「京女の森」での活動②

〔写真11〕「京女　鳥部の森」での活動①

〔写真12〕「京女　鳥部の森」での活動②